

消えた(?)最古の漢文

松まつ

丸まる

道みち

雄お

漢字の現存する最古のものが、いわゆる甲骨文字であることはほぼ常識で、河南省安陽市小屯村のいわゆる殷墟(いんきょ)から大量に出土、漢字研究・殷代史研究の根本史料となっている、といった程度のは、本誌の読者なら、どなたもご存知のことであろう。殷代後期(殷王朝第二十二代武丁から殷末王紂・帝辛の間。西暦前十四〜十一世紀)の所産で、十九世紀末より今日まで十萬片前後発見された、文字数にして六千字前後はあろうかという大文字群であって、すでに、かなり発達した文字であるといつてよい。当然、これを遡る、より未発達な漢字が発見されるに相違ない、と多くの人は考えたのである。

たしかに、新石器時代以来の多くの考古遺物の上に、文字ふうのものが刻みつけられているのは多数発見されていて、中山大学の曾憲通教授の集計では、三十ヶ所以上から八百六十箇ほどの文字様のものが見つかっている、とされる。そのうちで、最も古いかと思われる一例をあげるなら、河南省舞陽賈湖新石器集落遺跡から出土の、ほぼ八千年前と考えられる亀甲や骨器・石器等には、様々な刻文が見られる。ただ問題は、これら全てが単体のもので、二つ以上が連続したものではなく、したがって、言葉との関係がわからない。文字であると判定するには、それが言葉を写しとる機能をもつことが確認できなくてはならない。つまり、それが漢字であるためには、漢文を綴る機能を持ったものでなくてはならない。

*

殷代中期(第十代仲丁〜第二十一代小乙。前十五〜十四世紀)は、古文献上ではその間に遷都を五回繰り



1953年鄭州二里岡発見
殷前期刻字牛肋骨拓本（原寸）
『考古学報』1957年第1期

での都城であつたと考えられている。そして、実は、この鄭州城の発掘がはじまったごく初期、一九五三年に、十文字の連続した刻文をもつ一片の牛骨が発見されていたのだ（奇しくも本年はこれが発見されて、還暦に当たる）。

私がそれを知ったのは、『考古学報』一九五七年第一期に載った河南省文物工作队第一隊によるはじめの簡報「鄭州商城遺址的発掘」によつてであつて、当時、東洋史学科三年生、ただしその頃の日本では、京大・梅原末治教授、東大・関野雄助教授は、孰れも「鄭州城は殷墟より降る、おそらく戦国時代の退化形式。殷墟より古いなどありえない」とのご意見だつた。

この簡報では、当片刻字を「又山土羊乙貞従受十月」と讀んだ上で、「句法を成しておらず、当時の習刻（手習い）の文字だろう」としていた。私もそれを真に受けて、関心はもつていたものの、それ以上、深く考えずにいた。

（今は）週二回発行される『中国文物報』という新聞を、私は航空便で取り寄せて欠かさず眼を通してゐるが、その二〇〇三年六月十三日号の、李維明「鄭州出土商代牛肋骨新識」という小さな囲み記事を見て驚いた。あの鄭州出土刻字骨は、デタラメに文字の練習に刻したものではなく、一連の占卜文として読

返したとされ、考古学的には、二、三の候補はあるものの、確定せず発掘もあまり進んでいない。遡つて殷代前期の都城が河南省の省都である鄭州市と重なることは一九五〇年に確認され、大都會の地下であることから、発掘もなかなか思うにまかせないのだが、それでもこれまで六十年以上に互つて営々と発掘が続けられ、殷の開祖の大乙・唐（文献では湯）以来、第十代中丁の初期ま

むべきだ、との主張である。冒頭は、「又(祐)毛(毫)土(社)羊、…」で、「毫の社に羊を献ずるに、…」の意味だろう、とする。成程…と私は感心した。「毫」は、今の鄭州の古名だとする有力な説があるし、「社」とは、古典中に「社・稷」と並称して出てくる土地神のことだと考えうる。⁽³⁾

その二年後の二〇〇五年十月、私は洛陽近くの偃師市での国際学会に参加、その遺跡見学バスで偶々隣り合い、名刺交換した青年が初対面の李維明氏(北京・国家博物館研究員)だった。名前に覚えのあった私が、氏の甲骨読法を讃えると、「外国の学者が、あの小文を読んでくれたとは…」と頬を紅潮させた。その直後のこれについての学会での私の発言が、『中国文物報』同年十二月二日号に掲載され、更にこれについての李氏のコメントも翌年一月六日号に出た。これがきっかけでこの刻文についての議論がにわかに活発になって、その後これを巡って十篇近くの論文がでている。

殷墟文字を遡る唯一の『漢文』の実物を見たくて、これを保管しているはずの鄭州の河南省文物考古研究所に申し入れたが、他のいろいろは見せてくれるのに、これだけはだめで、不思議に思っている。今も一九五〇年代の表面の粗末な写真と不完全な拓本が公開されているだけで、カラー写真も裏面のモノクロ写真も未発表のままである。『最古の漢文』を紛失してしまったのではないことを、私は祈っている。

注(1) 河南省文物考古研究所『舞陽賈湖』(科学出版社、一九九〇)

注(2) 後に知ったがこれの最初の文献は陳夢家『解放後甲骨的新資料和整理研究』『文物參考資料』一九五四年第五期で、簡報の見解は、ここでの陳氏の見解をほぼ踏襲している。

注(3) 例えば、赤塚忠『殷王朝における「土」の祭祀』『中国古代の宗教と文化』(角川書店、一九七〇) 参照。

松丸 道雄(まつまる みちお)

一九三四(昭和九)―。東京大学名誉教授。

主な編著書―『西周青銅器とその国家』『甲骨文字字釈綜覧』など。
本年四月小社刊『中国文化史大事典』編集委員。

【座談会】

もう漢文指導に 迷わない！

新指導要領では、小・中・高を通して伝統的な言語文化の重視が目標の一つとされ、古典指導の必要性はますます高まっています。一方、学校現場では、古典を専門とする先生が減り、特に漢文指導に悩む先生方が多くいらつしやいます。本誌では、そんな先生方の悩みに応えるべく、漢文指導に關して若手とベテランの交流をはかる座談会を企画しました。

つかだかつろう
塚田勝郎
まついえ
松家 滋
きたくぼ ゆき
北久保友希
たちばな
橘 和久
かずひさ

(聞き手＝編集部)

漢文をめぐる状況

橘 橘と申します。大学・大学院と漢文を専門としてきたのですが、自分が興味を持ったことについて学ぶのと、その面白さを生徒に伝えるのは違うということを日々痛感しています。本日はどうしたら漢文の楽しさを伝えられるのか、ということを中心に話を伺いたいと思っています。

北久保 北久保と申します。私は普段どうしても読むことだけに偏った授業をしていると感じていますので、どうすれば生徒がもっと主体的に動く授業を展開できるのかということ伺いた

いと思っています。私の勤務校は、センター試験の平均点が今年は七〇点前後。センターで漢文を受ける生徒も限られていて、授業で漢文を二〇〇人受けるにすればその四分の一、五〇人しか試験は受けません。そのため古典の授業は古文がメインになりますし、古文の力があれば漢文の問題も解ける、という考えで授業を進めている先生が多数派だと思っています。

橘 私の勤務校はいわゆる進学校に分類される学校です。二年生から文系理系でコースが分かれ、三年生になると、さらに私立文系・国立文系・文系東大・私立理系・国立理系の五つに分か

れます。理系志望の生徒が多く、文系でも受験で漢文を使わない者がいますし、漢文学習に対するモチベーションの高い生徒はさほど多くはないように感じられます。また、我々教員も、古典の時間が足りない場合には古文を優先し、やむを得ず漢文を後回しにしてしまうことがあり、何とかしたいと思っています。国語科は中高あわせて専任が十四人いるのですが、昨年は漢文専門の者は私を含めて二人でした。さらにお一人は本年三月でご定年で、その後の補充もなく、現在専門は私一人という状況です。

北久保 私の勤務校は国語科八人で、



橘 和久（たちばな・かずひさ）
私立城北中学・高校勤務2年目。
今年度は主に高校1年生を担当。

漢文専門の方はいません。私も大学の専門は心理学で、大学院で国語教育を学びました。

—— 厳しい状況の中で、どなたでも教えられるような漢文をめざしていかなければならないことになります。

松家 松家と申します。若い方が漢文を苦手だというのは前から聞いています。ぼくは都国研（都立高校国語科の教員団体）で教材研究の研修会を続けていて、一昨年は月一回、年間を通して漢文教材研究の連続講座を行い、おかげさまで好評でした。現勤務校は少し変わってしまして、在京外国人枠と、海外の日本人学校を卒業した生徒

の枠があり、日本語がほとんどできない子も入ってきます。センター試験で漢文が必要な生徒は最終的に一桁くらいなので、ぼくはセンター対策の授業はあんまりしないんです（笑）。時には中国籍の生徒と授業中に中国の歌を歌って部分否定を覚えたりする。「楽しい漢文教室」というものをめざしてやっています。

塚田 塚田と申します。三十七年間の教員生活の中で、今の学校を含めて三つの学校を経験しました。漢文が好きだという生徒、受験のため仕方がないから漢文をやっているという生徒、漢文なんて冗談じゃないという生徒、いろいろな出会いがあった中で、結局、私が好きな作品を中心にどの学校でもやってきたように振り返っています。今日は若い先生方からたくさん質問が出ても、うまく答えられる自信はないんです。でも、こんな経験があります、こんな失敗をしました、ということは出せると思います。どんどん聞いてください。

「これだけは教えたい」教材

塚田 北久保先生は教材研究はどんなふうにやっていますか。

北久保 まずは、指導書にあたることから始めます。語句でどこを調べさせるか、予習の部分を決め、あとは授業でどこを重点にするかを決めていきます。一時間の中で二つほど山場が決まるように配分します。

塚田 この教材をやるうというのは自分で決めるのですか、それとも教科の中で申し合わせがあるのですか。

北久保 教科が決まっています。都立高校では年間シラバスを年度当初に公表し、それをもとに授業を進めることになっています。ただ前年度中に担当者未定のまま提出が求められるため、前年度担当者のシラバスをそのまま引き継ぐことも起こっています。

塚田 すると先生がつまらないと思って授業をすることもあるのですか。

北久保 意に沿わないことはありますね（笑）。私なら現代文の短歌と古文の和歌をあわせてやりたいな、とか。

松家 シラバスは学校によって随分扱いが違いますね。ぼくは、あまり束縛されずにやってくることができました。だいたいの大枠は決めるものの、具体的な中身については、ここ数年は、基本的に若い方がやりたいものにこちらが合わせる形でやってきました。もしみんなで作るのだったら、むしろ若い方たちが作ってみて、それをベテランが手直しをするという方法がいいんじゃないかと思えますね。学校の雰囲気もあるので一概には言えないですけども。

橘 我が校でもやはり、初めに年間計画を提出して、基本的にはそれに従って授業をやっていきますが、教材を変更することもあります。例えば昨年度は、時間が不足している、生徒の理解が追いついていない、などの理由から、先生同士で話し合ってより短い教材に変えたことがあります。そういう意味ではかなり柔軟かもしれません。

塚田 私は授業というのは、もつと素朴に考えていいんじゃないかなと思いますね。まず教師がやりたいものを

やる、楽しいものを選んでやるというよな。一年分の授業の計画を四月の初めに出すというのは実は大変なことです。

松家 シラバスをつくるにしても「これだけは教えない」というものをしっかり持つことは大事だと思っんですね。ぼくなんかも、こちらがあまり楽しめないものというのは、教えていてもどうしてもテンションが下がって、これを選んで失敗したな、と思うことが今まで何回もありました。それは、ぼくらが対象にしているのは生きている生徒だし、授業はライブですから、当たり前のことなんです。またこちらの思い込みでやっても、全然手応えがないってこともあります。ただ、「これだけは教えない」というものは、教員の中で共通理解があった方がいいと思います。そして、やってみてどうだったかという体験の交流も、できれば科の中でしっかりとっておいた方がいい。視点を変えてみると、同じ教材でもこういうふうにやったら面白いよ、なんて話も出てくるかもしれない。次やる



松家 滋（まついえ・しげる）
都立高校勤務を経て、現在は都立国際高校勤務。訪中歴は60回を超えている。

ときはこうやってみよう、という積み重ねです。これは漢文に限らずですが。
塚田 学校の中で日常的に相談したり、教え合ったりできるといって雰囲気はともてん大事だと思いますね。だんだん学校が忙しくなってきたら、報告文書の作成や、部活指導に時間がとられる。それを言い訳にして、教科内で話し合うことが少なくなってきたのは、とても残念なことなんです。大学で習ったことなんて本当に僅かで、しかもあまり役に立たないんですね（笑）。学校に勤めているメリットって、同僚や先輩、後輩から、いろんなヒントをもらえるってことだと思っんですね。だから北



北久保 友希（きたくぼ ゆき）
都立江北高校勤務 4 年目。
今年度は 1・3 年生を担当。

久保さんも、シラバスにもほとんど不平不満を言ったらいいんじゃないですか。もう四年目なんだし（笑）。

松家 他県の進学校の話ですが、一時間ごとにきっちり決められた感じがらめのシラバスでやっているという方がいました。ところが、その方が楽でいい、と言う人もいます。いまの若い人はこうなっちゃっているのかなあ、と愕然とした経験があります。

——言われたことは完璧にできるけれども自由にやれと言われると困ってしまう。そんな若者も世間では増えていると言われています。

塚田 教員をやっているどこに喜びを見出さんだろう。重労働で給料が安く、世間的な地位もあまり高くないくて、好きなことができないなんて。

松家 一方で、そういう状況に危機感を持って、一生懸命日々悩んでいる若い方もいるのですが。

なぜ漢文をやるのか

橋 私はまだ二年目ということもあって、やりたいことがやれないというよりは、自分の力のなさを実感しています。漢文について他の人より時間をかけて学んできたはずなのに、実際教えてみると、どうもそれが役に立っていないような気がして悩むことは多いですね。授業のあとに、生徒が断片的に印象に残ったことを話していたりするのを聞くと、そのたびにもう少し生徒から感想や意見を引き出したいなあと思ったりします。その延長線上に、漢文が面白いなあという気持ちもあるような気がします。

塚田 それは何年生の授業ですか。

橋 高校二年生です。『史記』の「鴻

門の会」などは、私は好きなので嬉嬉としてやっているんですが。

松家 橋さんが楽しかった授業というのは生徒の反応も違うでしょ。力を入れた授業は自ずと伝わるんです。

橋 男子校ということもあり、樊噲^{はんかい}が盾をまな板がわりにして剣で生の豚肉の塊を切り裂いて食べたり、立ったまま大酒を飲み干したりする豪快な場面の反応は良かったです（笑）。

松家 そうでしょう。まずはこちらが楽しいと思うのが先ですよ。

塚田 自分が好きで、よく読んでいて、ぜひ生徒に語りたいという教材をどんどん増やしていけるといいね。

北久保 私は『史記』では項羽の最期の場面が好きなんです。項羽は、自分がもう死ぬと悟ったあと、それでもさらに数百人を斬るんですよ。なぜこの人は、もう死ぬとわかっているのに被害を拡大させて死んでいくんだろう。と私が問いかけると、生徒ははたと考え始めます。

松家 それは面白いね。

北久保 中国の砂だらけの風土とか、

広さとか、スケールの大きさとかを生徒に伝えたいんです。土といったらもう黄色い土が浮かぶような。そんな授業をしたいなと思っています。

松家 大修館の教科書『新編国語総合』だと、ちょうど古文編に『平家物語』『壇の浦の戦い』が入っています。知盛の「見るべきほどのことは見つ」という有名な台詞がありますね。被害を拡大させる、教経をたしなめてもいる。その死に様を項羽のそれと比較してみるのも面白いんじゃないですか日本人と中国人の感覚の違いも見えてくる。

橘 同じ『平家物語』との比較でいうと、『新編古典』には「木曾殿最期」もあります。最期に武勇を示そうとする義仲の姿は、項羽の最期にも通じるものがあります。そうやって、授業で読んだものをできればリンクさせたいという思いはありますね。まだ実践できていませんが、そういうふうにしていくと、生徒の食いつきもまた違ってくるんじゃないかなと思います。

——昔の日本人は中国古典をよく読んできているんですよ。大修館の教科書でも、相互に影響を受けた作品を同時収録する工夫をしています。

塚田 現代文や古文との融合的な授業は、難しいけれど国語の教師としては夢ですね。こちらからあまり言い過ぎず、生徒に気づかせるようにもってけるといいかもしれない。

松家 なぜいま漢文を、中国古典を教えるんだ、という質問に対してのひとつの答えにもなるんじゃないかと思うんですけどね。比較文化という視点で見ること、個々の教材だけでは見えないものが見えてくることがあるように思います。

生徒にいきなり訳させない

北久保 授業の進め方について少し具体的に伺いたいと思います。私のクラスでは、訓読の確認までは全体の足並みが揃っているように思うんですけど、そこから故事成語に入って、訳をつくることになる我突然つまずく

ように感じます。

松家 まとまった文章の学習になると訳がつかれない、ということですか。
北久保 はい。「わかりません」の声が増えてしまう。

松家 例えば「五十歩百歩」にある「請ふ、…」のような言い回しは、日本語にはないので戸惑いますよね。そういうところで拒否反応が出るようなくてもいいかもしれませんね。

塚田 私は、授業ではあまり生徒に訳させるといことはしないですね。それよりも、この漢字の基本的な意味は



『新編古典』より (→ 31 ページ)



塚田 勝郎（つかだ・かつろう）
埼玉県立高など37年間で3校に勤務。
現在は筑波大学附属高校で1・3年生の
漢文を担当。小社教科書編集委員。

なんだろうか、ここではどんな意味だろうかということを知ったり、調べさせたりすることに時間を使います。というのは、北久保さんがいま悩んでいるように、いきなり指名をしても生徒はうまく訳せないからなんです。その前に、いわゆる漢文の訳というものはどういう性格のものなのか、生徒にも説明してやるのがよいと思います。だって、訓読自体が訳なわけですよ。訓読したらもう意味がわかるんです。藤堂（明保）先生に「訓読は六割の翻訳である」という名言があります。北久保 六割ですか。

塚田 いまは文語文法の力がなくなっ

ているから三割くらい下がっているかもしれないが（笑）。まず、手がかかりとして訓読した文章があり、その上で、我々は平易な現代語訳をめざすわけです。

橘 私は授業の進め方として、現代語訳のみをめざすことに抵抗があります。訳して終わりなら、やろうと思えば本

などでも調べられるし、こんなことが書いてあるよという表面的な読み取りをさせるだけにとどまってしまうと思います。ただ、授業では生徒も最終的に訳を求めているようなところがあるんです。訳を示すタイミングについてはいかがでしょうか。

塚田 訳の与え方はいつも議論になるんだけど、私はわりと丁寧に、授業中に訳を示していますよ。ただし、目の前の教材を訳すことが最終目的にはありません。

「足す」「引く」「言い換え」で訳す

塚田 私は、生徒には訓読したものをまずはできるだけ直訳しよう、逐語訳でいいよ、と言います。だけど、しよ

せん外国語を訳しているんだからうまくいかないことがあります。そのときどうするかというと、あるときは足したり、あるときは引いたり、言い換えたりするんです。例えば主語がない、目的語がないときは「足す」。いつても「之を」「其の」を訳したらおかしいですから、そういうときは「引く」。そして、先ほどの「請ふ」のようなものは「：させてください」とか「：したい」と「言い換え」をしてやる。そうやって方法を示してやることで生徒も少しずつ訳し方を習得するんじゃないかな。

松家 なるほどね。

塚田 その前段階として、私は生徒には必ず自力で教材を読んでもらうことを義務づけています。読んだ証拠として書き下し文を作らせるんです。ノートの上段に書き下し文を書いてくるのが予習ですね。そのとき下段は空けたまま、授業中に私の訳を書き取らせま

すよね。ですから、学びの身体性を利用するだけでもいいのか、わざと不恰好なプリントを作って、それをハサミで切り取ってノートに貼る作業をさせたりします（笑）。

橘 授業中に書き取るとなると、人によってノートの質がばらばらになってしまいませんか。

松家 レベルが多少違っていてもいいと思いますよ。生徒の方で、ここはちゃんとやらないとまずいな、というところは考えられると思うんです。一から十まで書き取らなくても、ここが大事だなとわかればいいんです。もちろん実際にぼんやりしている子はいるので注意が必要ですが（笑）。

塚田 生徒のノートを見ると、私よりもっとスマートな訳を書いていることもあります。自分で工夫して。

北久保 ノートはどこでご覧になるんですか。

塚田 私は生徒が正しく漢文を読んでいるか知りたいので、毎時間必ずノート点検をしています。提出は自由なのですが。生徒は予習としてしっかり読

んでくる、そのついでに書き下し文の書き方を覚える、というスタンスです。生徒のノートを見ると、前の授業で私の説明の足りなかったところや、誤解を招いたところが発見できることもあるので、とても有意義ですよ。

訓点パズルはほどほどに

橘 生徒のノートでは、白文に返り点を打つ作業をさせた時に気になることがあります。ハイフン（-）を使って無理矢理読んでしまう子が多いのは不思議です。

松家 ああ、ありますね。真面目に考え過ぎちゃう生徒に多いですよ。読むときに誤解がないように返り点を打っていくんだから、必要がなければつけないでいいんだよ、と言ってやるんです。まあこれは昔の訓読にだっていろいろな流儀があるので、それほど神経質になる必要はありません。徐々に覚えていくものですよ。

塚田 訓点の練習が実際の例文であればそれほど迷いはないかもしれませんが入門期に数字や記号を使った返り点の

練習は、あまりさせない方がいいですよね。

橘 作業としては確かに面白いので生徒の反応はいいようですが。

松家 パズル的な面白さはあるんですが、それだけであつて、発展性がないんですよ。

北久保 身につまされます。

松家 それだけをあんまり長いことやるんじゃないくて、格言のような短いものを読んでみる方がいい。

塚田 実際に訓点のついた漢文を読むときは、返り点より先に文字を見るわけですから。漢文がそんなパズルみたいなものだと思われちゃうと困ってしまいます。

松家 そうそう。それでなくても時間が少ないんだから。もっとやるべきことはたくさんありますね。

音読は理解の第一歩

北久保 私は授業の初めに必ず全員で音読をさせています。それで生徒の参加意識が高まると思っているからです。ただ、時間をかける割に反応が少ない



クラスもあって、困っています。

松家 それは、いわゆる斉読ですか。

北久保 クラスごとに差が出るのは斉読ですね。ペアで立たせて双方が読んで、終わったところから座る、というようなことをさせると、まだ声が出るようです。

橘 私も音読にはあまり時間をかけていられないのが実状ですが、一時間に一、二回は必ず音読をします。まず私が区切って読み、それを繰り返させるというスタイルです。ある意味、眠気覚ましの効果もありますので、場を動かしたいときに行います（笑）。クラスごとのノリの違いも確かにあって、学年が上がるのに反比例して、音読のモチベーションが下がっていくような印象も受けます。

塚田 学年を追うごとに、生徒が音読に興味を示さなくなるのは自然なことかもしれません。音読によって何が得られるのか、何を目指しているのか、きちんと確信をもって臨むことが大事なんじゃないかな。

北久保 私自身は音読にどんどん取り

組みたいんです。先ほどの学びの身体性ではないですが、まずすすきりするんですよ。

松家 いいですね。

北久保 それから、何度も声に出すことによって、リズム感も手伝って覚えてしまう、すらすら読めるようになるということがあります。それは音読のメリットですよ。

橘 音読をするということは読みの確認にもなるんですよ。テキストの訓点を踏まえながら音読していくと、訓点に従って読んでいく力も自然と身につくんじゃないでしょうか。

塚田 たまにもものすごくできない生徒がいたりすると、私は補習としてただ教科書を音読させます。これを一か月続けると、見違えるようにテストの点数が上がります。なぜかというところ、彼らはそれまで、まったく漢文を読まないで問題を解いていたんですよ。黙読では、実は読んでいないのと変わらないうんです。音読することによって理解の第一歩を踏み出せるんですね。

発問は人それぞれ

北久保 漢文の授業の悩みとして、現代文のような内容理解の発問ができない、という物足りなさがあります。読み方、解釈を教えるのが精一杯で、生徒に思考させる時間がとれない。例えば「蛇足」では「一番に蛇を描き上げた人はなぜすぐに酒を飲まなかったのか」なども聞いてみたいのですが。

塚田 発問の仕方に無理があるんじゃないかな。「蛇足」は楚に斉への攻撃を思いとどまらせるためのたとえ話なんだから（笑）。

橘 故事成語の時代背景なんかをもっと説明する時間があれば、深い発問ができるのでしょうか。ただ知識を与えるだけでなく、生徒に考えさせたいのは私も同じなんです。

塚田 私は、授業では教科書の導入文を読む程度にして、定期テストに出しますよ。「今度出すから、調べておくといいよ」なんて、予告したりしてね（笑）。内容に踏み込む発問は人それぞれ、教材の予習をしたり、何度も経験

を積んでいく中で、少しずつ貯金をつくっていくしかないのかもしれないですね。

松家 「蛇足」も話自体は独立しているけれども、こういうたとえ話を使って作者がどういうことを主張しようとしていたのか、何を伝えたかったのか、高校段階ならばぜひ考えさせたいですね。

漢文の時間だけが授業ではない

松家 我々としては、広義の教材研究というのか、教材から少し離れて、中国の歴史や文化、風俗に関する本などを讀んだりすることに時間をかけるべきじゃないかと思います。先ほどの発問についてもそうですが、教科書や指導書だけで授業を組み立てるのではなくて、いろんな本にふれることが大事です。

塚田 一冊でも読むか読まないかで全然違うでしょうね。すぐには結果が出てこなくても、授業に幅が生まれ、ふくらみが出てくると思います。

北久保 授業準備の大切さが改めてわ

かりました。それに、あえて生徒に考えさせる、調べさせるという余裕にも気づかされました。今後に活かしていきたいと思います。

橘 授業準備や教材研究になかなか時間をかけられないということは痛感しています。もっと計画的にやっていたくないといけないですね。

松家 ばくが若い頃に比べて、先生方が本当に忙しくなっているというのは客観的事実ですね。本人の意志にかかわらず、教材研究に割ける時間が物理的に少なくなっていて、大変なんだなあと感じています。それに、漢文の授業時間が少なくなっているというのは、どこの学校でも同じです。漢文の時間に限らず、例えば現代文で漢字指導を熱心にされている方などがいらつしゃると思うんですが、日常使う漢字や熟語の語彙を教えていく中で、語のなりたちとか漢語の基本構造を意識させるなどの工夫をしていくといいと思います。漢文の授業は実はそこから始まると思うんですね。漢文専門であるかどうかではなくて、ばくらがどこまで意

識して教えていけるか、生徒に実感させられるか。それが大事なんだと思っています。

塚田 日常の言語生活を見直すきっかけは、漢文学習の中にたくさんあります。例えば「天変地異」「千差万別」のような熟語の構造について、生徒は漢文の授業で習わなければ一生気がつかないかもしれません。しかし、一度知らせると面白がつてどんどん探します。同時にそれは私たちが授業を楽しむことにつながるんじゃないでしょうか。私たちは教えることが好きだし、生徒と一緒に考えることが好きです。授業をやつて良かったな、という気持ちになりたいですね。それを支えるのは、計画的な授業準備と、幅広い教材研究に尽きると思います。我々は経験者として、いつでもお手伝いできるようにしていきたいと思っています。

——ありがとうございます。

(二〇一三年三月十七日)

高等学校における漢文指導

漢文の危機

漢文という教科目は危機的状況にあるとよく言われるが、その原因は何かと考えた時、さまざまな問題点が思い浮かぶ。まず、生徒にとって、漢字ばかり並んだ難しいものだという認識が挙げられる。初めて見る漢文は、専門的にやってきた者でもそうすらすらと読めるものではないから、これは当然であろう。また、現在の生徒は体内に漢文脈を持っていない。ある程度の年配の者は幼少時から大人たちの漢文脈の会話を聞いて育ってきたので、体内に漢文脈がある。ところが現在では漢文脈で会話が為されることがなくなってしまう。体内に漢文脈を持たないのは、言葉が大きく変化している現状では仕方ないことである。

しかし、最も問題なのは次の点である。国語の教員の中にもどうも漢文を苦手として、出来得れば避けたいと思っている者がある程度存在する。しかし、漢文は教えなければなら

渡^{わた}
邊^{なべ}
雅^{まさ}
之^{ゆき}

(元筑波大学附属高等学校)

ない。一方で、学年で共通の考查を行うため、ある限定された期間で教材をこなさなければならず、いきおい、消化するだけの授業となってしまうという点である。専門的に漢文を学んでこなかった教員にとっては、漢文に取り組もうという意欲があっても、校務に追われて時間的余裕がないのも事実である。やむを得ず、参考書や指導書に頼った授業となってしまう。では、どうすればよいのか。ここでは、その参考となることを期待して筆者の拙い経験を披瀝してみたい。

キャッチボールの勧め

漢文に限らず国語の授業は、筆者の経験からいうと講義式一辺倒は無意味である。講義式一辺倒の授業は現在では教員の側もあまり行っていないということは、研究授業などを参観すると明らかである。なぜなら講義式は生徒が受け付けてくれない。内職するか寝てしまうかという結果を招いてしまう。そこで、いわゆるフロッチャートの的なプリントを用意し、

その作業を生徒に課すという授業が多くなっているように思われる。作業を行わせると生徒は意外に食いついてきて、熱心に取り組む傾向があるようだ。教員の側もその様子に満足しがちである。しかし、筆者はこの種の授業にはあまり賛成できない。フロッチャート式の授業は知識を詰め込むだけになるという欠点を抱えているからである。そのプリントを準備するのは教員側なのである。その教員がその作品で読み取ったことのみが反映されていることが多いのである。それよりは、生徒が初めてその教材に向き合った時に感じたこと、疑問に思ったことを全員で共有していく授業の方が、授業は活きるのではないか。その感じたこと、疑問に思ったことをうまく生徒の側から引き出し、活かしていくのが重要なのだ。生徒の疑問に答えるという、生徒とキャッチボールをする学習法は、教員側としても大変面白く、大いに効果のある学習法だと確信する。ここでは筆者の拙い経験として、高校の現場で実際にあったやりとりを二つ紹介してみる。

1 「矛盾」の場合

まずは、故事成語の「矛盾」。「矛盾」は、一部の小学校教科書に単に言葉として取り上げられている。中学校教科書には五社すべての教科書会社が一年生の教材として取り上げている。そして、高校の教科書にも九社中四社ある。中学生の

ほぼ全員が既習である教材を高校ではどう教えるのか。それに触れつつ、過去経験したことを述べる。

今から十数年前の「矛盾」の授業で、ある生徒から「商売人ならこんなにすぐ嘘だとわかるような売り方をするところがあるのか？」という疑問が出されたことがある。すぐに他の生徒が、「ここは、あくまでたとえ話として韓非子を取り上げているので、それこそ多少の矛盾は無視して良いのでは」と意見を述べた。他の生徒が「現在でも誇大広告が問題になるくらいなので商売人としては当然の売り方だ」と意見を述べ、結構議論となった。続いてある生徒から「これは売り手もそんな馬鹿なことには気づくはずなので、売っている時間の問題なのでは？」という意見が出された。つまり、まず盾を売りつけようとして口上を述べ、かなり時間が経ってから矛を売りつけたと考えればよいというのだ。この売り手はまさかずっとそれを聞いている客がいるとは思わずに、安心して口上を述べたのではというのである。だが、実際には一人の客がずっと口上を聞いており、その矛盾に気づいて発言したのだというのだ。なかなか面白い意見である。生徒にも賛同者が何人かいた。もちろん、これは韓非子が堯と舜という二人の聖人が同時に存在することの矛盾を指摘し、古代の聖人をあがめすぎる儒家を批判するためのたとえ話なので、最初の答えを述べた生徒が正解なのだろうが、この議論の過程

の方を筆者は重視したい。教員の側も参考書や指導書に頼りすぎ、周辺の教材も頭に入れてしまうと、こういう素朴な疑問が出てこない。教員も含めて、もっと純粹にその教材に向き合うべきではないのか、自分の反省もこめてそう思う。

2 「江雪」の場合

柳宗元の「江雪」は中学の教科書には見えないが、高校の教科書にはかなり取り上げられている教材である。この詩に關して、こちらは二十年ほど前のことになる。その前の年に生徒から次のような質問が出された。「こんな大雪の日に釣りをする翁の存在は変なのでは？」というものである。そこで、翌年、こういう実験を試してみた。受け持っているクラスのうちの二クラスを選び、一方のクラスでは作者、柳宗元について説明し、さらにこの詩が作られた時の作者の境遇（中央から左遷された）についても説明してから、作品を鑑賞した。もう一方のクラスでは作者について全く触れずに作品を鑑賞してみた。その上で、この詩の中の翁はどういう人物なのかという質問を生徒に投げかけてみた。すると、顕著な違いが見られた。

作者について触れたクラスでは、この翁は作者の心象風景だという意見が多く出された。もちろん水墨画的な実景の詩だとする意見も出た。ところが、作者について触れなかった

クラスでは、心象風景とする意見は皆無ではなかったが、ほとんどが実景とした。実は、この詩は学者によっても心象風景、実景という二つの意見に分かれている。筆者の調べた限り、中国の学者に実景とする意見が多いように思われた。この授業で、作品を与える前に、あまり作者について触れると純粹にその作品を鑑賞する妨げになるということが分かった。漢文のとくに詩教材の場合、作者には事前に触れるべきではなくすぐに作品の鑑賞を行った方がよいと思う。これも純粹に作品に向き合うことが大切だと考えるからである。

終わりに

漢文に限らず、現代文でも古文でも、引いてはどの教科でも教員がその教材を面白いと思ひ、何とかその面白さを伝えたいという熱意を持つて授業を行えばよいというのは言を俟たないであろう。その点で、この二つの実践例は、実際に教室で授業を行つていて実に楽しく、興味深かつたということが言える。もちろん、そのためには教員側のしつかりした教材研究がなされなければならないが、時間に余裕のある限り、いきなり参考書等に頼るのではなく、まずは自分で純粹にその教材に向き合うということが極めて大切であるといえよう。一方通行の授業はあまり実りが多くない。生徒とのキャッチボールをぜひ行つて欲しい。

●特集Ⅱ漢文教師を「育てる」

楽しく活気ある漢文教室をつくらう！

——訓読のきまりの指導から創作四字熟語へ

江川 順一
えがわじゅんいち

(立命館慶祥中学校・高等学校)

私たちが訓読のきまりについて指導するとき、まずは漢語の基本的な四構造について説明するだろう。①「主語―述語」(例／雷鳴)、②「修飾語―被修飾語」(例／清風)、③「並列」(例／禍福)、④「述語―補語」(例／帰郷)である。そして、各々の例について、①「雷鳴ル」、②「清キ風」、③「禍ヒ・福ヒ」、④「郷ニ帰ル」などと書き下す。その後、「日進月歩」「東奔西走」などを取り上げ、それぞれ「日月ニ進歩ス」「東西ニ奔走ス」を互い違いに構成した互文について補足し、四字熟語の説明へと広がりを持たせよう。

訓読の指導については、だいたいこのような手順になるのか。ここでは、一連の訓読のきまりの指導を一步進めて、四字熟語の発展的指導について、提案したい。

国語総合の学習指導要領解説には、「漢字の指導は単調なものになりがちである。そこで、漢字の成り立ちや特質に触れたり(中略)するなど、生徒の学習意欲が高まるよう工夫する必要がある」とある。そこで、高校一年においては、四

字熟語を創作する言語活動を設定した。

創作四字熟語は、一定の条件を取り入れてつくる詩歌の創作などと同様の言語活動であるとともに、伝統的な言語文化に対する理解を深めさせることができる活動である。

まずは、便覧等に掲載されている四字熟語の一覧表を配付して説明した。

次に、住友生命保険相互会社が平成二年から始めている「創作四字熟語」のプログラムを紹介した。この企画は、世相を題材に四字熟語を創作するものであり、具体的には、もともとある四字熟語(住友は「元祖四字熟語」と命名)を用い、ほんの少しヒネリを加えることにより、誰もが忘れられない大事件をズバリと表現するものである。

過去の最優秀作品をいくつか紹介する(「」内は「元祖」)。

①「異旗^{いき}統合」(一九九〇年) 東西ドイツの統合をさす。〔意気投合〕

②「圏外孤独」(二〇〇〇年) いつも携帯電話でコミュニケーションをとっている人にとって、圏外になった時の孤独感^{きどく}はひとしおであることをさす。〔天涯^{てんや}孤独〕

③「万国胸痛^{きょうつう}」(二〇〇一年) 米国でのテロ、それに対する報復。世界はどちらにも胸を痛めている。〔万国共通〕

これらの他にも、「死意止帯^{べルト}」は「シートベルト」など、元祖が四字熟語ではないものも可としている。「様々様様」

は、なんと「ヨン様」。これらに共通している創意工夫は、「元祖」を活かし、意味と音がうまく共鳴し合っていることである。ここが創意工夫の眼目である。

これらの作品を三〇作品ほど紹介し、その創意工夫について言及し、これらに負けないものを創作しようと提案した。生徒の作品とコメントを掲載する（「」内は「元祖」）。

①「厚顔無駄」 厚い化粧はムダなもの。[厚顔無恥]

②「授業必睡」 授業は必ず寝てしまうこと。[盛者必衰]

③「地震焼失」 地震でありとあらゆるものが焼けてしまい、すっかり自信をなくすること。[自信喪失]

④「震災求円」 震災の救援にはお金がいるから、みんな

「求円」しよう。[震災救援]

⑤「一客千金」 政治家の所に来る客はたいていワイロを渡すので、政治家はたやすく利益を得られること。[一攫千金]

⑥「安産第一」 安産で産むのが一番よい。[安全第二]

⑦「菜食源美」 野菜を食べることが女性の美しさを作り出す。これは一つの才能かも。[才色兼備]

⑧「右翁左嫗」 高齢化の時代で、おじいちゃんやおばあちゃんが右にも左にもいる時代になり、その対応に皆があわてて混乱している。[右往左往]

いかがだろうか。生徒の息づかいが聞こえてはこないか。

「授業必睡」といったとき、ほとんどの生徒が中学校で学んだ『平家物語』がいかにいかめしいものだったかが立ち現れてくる。元祖の「盛者必衰」という呪文のような冒頭部分のフレーズを授業で耳にしたときに必ず寝てしまうというのである。「盛者必衰」と「授業必睡」との落差が、生徒の生活感と相俟って独特のユーモアを醸し出している。うまい。

教師が提案する言語活動が、作文のように形式から内容に至るまですべてがその裁量に任ざれていると、生徒は戸惑う。そこで、一定の形式をあらかじめ提示することで、創作意欲を活性化させるのである。とりわけ四字熟語のようなしつかりした型があると、それらを換骨奪胎して新しいものに作り換えることに生徒は才能を発揮することができる。こうした創作は、われわれ日本人が四字熟語という文化を共有しているからこそ可能なのであることにもぜひ触れたい。

もつと漢文の授業をしよう！ もつと漢文を楽しく教えよう！ 漢文の授業をいわゆるプロパーの手から取り戻そう！ 四字熟語の授業で「盛者必衰」などと呪文を唱えていないで、生徒の頭から「授業必睡」を引き出そう。単に覚えさせるのではなく、自分の頭で考えさせ、創作の領域で思う存分創意工夫させることにより、初めて生徒自身のものとなる。

四字熟語は、漢文と現代文とのよき架け橋となる。もう漢文はこわくない。創作の翼を得て、ぜひとも自信を持って、漢文の授業に取り組んでいただきたい。

●特集Ⅱ漢文教師を「育てる」

漢詩を「戯訳」してみよう

おおむらとき
大村 勅夫

(北海道旭川東高等学校)

漢詩の魅力の一つは音韻、特にリズム感にある。たとえば、見事な対句などに生徒は惹き付けられる。(昨年度に指導した中では、「春日憶李白」の「清新庾開府、俊逸鮑參軍」の箇所を非常に気に入る、それで唱え始めた生徒もいた。)もちろん、音韻だけではなく、解釈についても指導するが、その読解を深めるために、あるいは、その理解度を把握するために、「書き換え」をさせてみた。「書き換え」は内容がしっかり理解されていないと出来ないことであり、そのためにはじっくりと読解を試みる必要があるからである。

今回は、高校一年生の一月に七五調で「戯訳」をさせてみた。戯訳とは、ここでは、井伏鱒二が于武陵の「勧酒」について、「花発多風雨、人生足別離」を「ハナニアラシノタトエモアルゾ」「サヨナラ」「ダケガ人生ダ」と訳してみたように、意識したもの意趣をさらに進めたものである。

ところで、七五調と規定した理由は二つある。一つは、短い字数に制限されることは、その内容を表すためにより適切

な語を選択する必要がある、つまり、試行錯誤を促す行為となるからである。二つには、リズムカルな体感をさせたいからである。韻文である漢詩の心地よい軽やかさを損なわないために、調子を持たせて詠ませる。

単元計画は以下のようである。

第1次 「江雪」「涼州詞」の解釈

第2次 「江雪」「涼州詞」の戯訳と相互評価

第3次 「贈別」の戯訳と相互評価

第1次では、両詩について生徒と共に解釈を進めると共に、「江雪」の対句を注目させ、「涼州詞」の動と静の情景を捉えさせた。講義を聞き、語注等を読むことで、生徒たちは解釈をなしていた。

第2次では、まず参考として、多くの中学校でも扱われている「春曉」の戯訳をいくつか挙げる。井伏、土岐善麿、松下緑のものである。そして、「勧酒」の井伏訳を挙げた。それらを参考に、「江雪」ないし「涼州詞」の戯訳を行わせた。第1次で解釈については指導したため、それほど苦勞していた生徒はいなかったが、七五調に合わせることに適度な刺激を受け、何度も指折り数えながら、あるいは口ずさみながら取り組んでいた。以下に、それぞれの生徒作品例を載せる。

江雪

千山鳥飛絶^{フコトエ}
万径人蹤滅^ス
孤舟蓑笠翁^{さりふ}
独釣寒江雪

風切ル音ハ聞コエナイ
地ヲ踏ム音モ聞ケヌママ
舟・笠ボツリタダ浮カブ
釣レヌ魚ヲ雪ト待ツ

涼州詞

葡萄美酒夜光杯^{スレバマント}
欲飲琵琶馬上催^ニ
醉臥沙場君莫笑^{ヒテス}
古來征戰幾人回^{なカレフコト}

夢見たようなパーティーで
酒に溺れて 歌に酔う
恥じらいなんて 忘れよう
二度とこの世で 会えぬなら

これらの生徒の作品は、教員側で口頭発表した。どの作品についても、生徒たちの反響は非常に大きかった。

そして、第3次では、前次の応用として、杜牧の「贈別」を投げ込み教材に用いて戯訳を行わせた。語注を五つだけ提示し、講義などはせず、生徒それぞれの解釈のみで戯訳させた。「贈別」を選んだのは、擬人法のように心情を蠟燭に仮託している情景を捉えさせたかったからである。戯訳をしている様子を見ると、前次の生徒作品を想起しながら、より素晴らしい作品を作ろうと、対句にこだわったり、脚韻をなそうとしたりする生徒も少なくなかった。また、七五調の戯訳

を完成させた者には、五七調や都々逸調での作成も提示したところ、嬉々として即座に取り組んでいた。
以下に生徒作品例を載せる。

贈別

多情却似総無情^{ハカヘツタリスベテナルニ}

アフレル思イ 重過ギテ

カカエルコトハ モウデキヌ

唯覺尊前笑不成^{ダユ}

笑エヌホドニ 悲シイト

蠟燭有^リ心還惜^シ別^レ

氣ヅケバ酒モ ススマナイ

蠟燭有^リ心還惜^シ別^レ

炎ハユレテ サダマラヌ

替^ハ人垂^レ涙^ニ到^ル三天明^ニ

ワタシヲウツス 鏡ダト

言^ハワンバカリニ 悲^シシンデ

永ク寂シイ 夜ガ明ケル

最後になるが、アンケートの結果などを見ると、この漢詩戯訳の授業は生徒にとつて非常に面白いものとなったようである。中でも興味深いのはある生徒のアンケートである。寺山修司の「さよならだけが人生ならば」が書かれていた。初めに紹介した「勸酒」の井伏沢を聞き、自分で調べたところであった。漢詩ならびに国語への興味や関心が非常に深まったものと考ええる。

●特集Ⅱ漢文教師を「育てる」

故事成語が孕む「論理性」を読み解く

「先ず隗より始めよ」での真の勝利者は誰か？

あらき
荒木美智雄

(北海道長沼高等学校)

一 故事成語の取り扱い

漢文で学ぶ「故事成語」は、初期入門として最適な教材である。それを訓点の用い方や書き下し文指導などに主要時間を費やし、内容について「寓話」的な理解だけでは、教材化の深化という観点からも消化不良となろう（渡辺雅之「故事成語の背景」『国語教室』01年2月号）。むしろ、歴史の荒波を乗り越え成立した故事成語の成り立ちを理解しつつ、その時代背景を学ぶ意義は、深い。そのことが、漢字文化を含む漢文学習の醍醐味だ。本実践は、さらにそれを推し進め、故事成語に内在する魅力的な「論理性」を読み解きたいと試みた。故事成語が孕む「論理性」の意味付けを深く考察し、その「追体験」によって新たな作品世界を再構築することが、この実践の趣旨だからである。

では最初に私の授業実践の目標をここで明示したい。

- ①音読を重視し、繰り返し読む。
- ②基本的な漢語、漢文句法の基礎を充分に認識・理解する。
- ③作品の時代背景のもと、登場人物の考察を行う。
- ④この作品に潜む「論理性」を探り、その意味付けを生徒

の生活実態と重ね合わせ、新たな「追体験」を行う。

二 「呼び水」理論から考察する「論理性」

では、授業実践を見ていこう。教師側の一方的な解説をできるだけ避け、自由な想像力で喚起させるため「初発カード」（「初発の感想」を設問形式にした筆者のオリジナルカード）を使って授業を展開した。指導計画は、以下の通りである。

- ①本文の音読指導（「一文リレー」・「シナリオ」読み・範読・指名読み）↓②書き下し文（生徒板書・模範解答）↓③「初発カード」↓④意味調べカード（宿題）↓⑤口語訳（生徒の板書）と「初発カード」模範解答の提示と解説↓⑥作品鑑賞（作品解説と作文）

では、「初発カード」の設問と授業過程（例）を紹介しよう。

【設問1】「君怒^ん」について、「古の君」はなぜ怒ったのか。

【設問2】「千里馬^{ムスアリ}至者三^三」で、名馬三頭が来たのはなぜか。

【設問3】この作品を要約せよ。（書けない場合、全訳・感想も可）

音読と書き下し文指導のすぐ後、本文理解の核心に迫る「設問」を提起したのはなぜか。自力で内容を想像しながら読み解く力が、読解力であり、それを生徒に求めたからである。教科書記載の歴史背景（導入文）には、昭王による賢者の招聘の経緯（昭王の熱望）が隠されている。登場人物については、大抵の教科書では脚注で詳解されているので読解の重要な道標となる。これらのヒントから自力で内容を読み取る過程は、模試でも活かせる「受験知」と重なり、国語力を

培うキープイントだ。生徒は、問題の深さにたじろぎながらも、各設問を自力で熟考せざるを得ない。辞典を片手に未知（難解）なる漢語を一心不乱に読み解く生徒たち。訳が繋がった時、その漢語は心に深く刻まれる。

【設問1】は、直前の文「買^{ヒテ}死馬骨五百金^ニ而返^ル」を訳せば解答できるが、なぜ死馬の骨を涓人がわざわざ五百金（金貨五百枚）で買い求め、逃亡せずに、（斬首の可能性を含みながら）堂々と帰国したのかわからない。疑問が疑問を呼び、【設問2】の「千里の馬が三頭もその国にやってきたのはなぜか」に収斂されていく仕掛けだ。なお、核心部分の「況^{シヤ}生者^ハ乎^ニ」は、「まして生きているものならなおさらだ」と脚注で通釈する教科書が多いことは極めて残念である。ここは、教師の発問による創意・工夫で教材化すべき最高のクライマックスなるが故である。

生徒との読解過程を考察しよう。【設問1】は前文訳「雑用人が死馬の骨を五百金で持ち帰ったから」と容易に判断でき、さらに、その前の使役の構文「昭王は千金で、千里の馬を買ってこいと雑用人に命じた」という部分を補えば正解。難題は【設問2】。脚注の「況^{シヤ}生者^ハ乎^ニ」とその前文「死馬且買^ハレ^ニ」を結び付けて「抑揚」の意味（繋がり）をどう導くのが、最大の焦点である。指示語「之」は何かと問えば、「馬」と、すぐ応答する生徒。この口語訳は、（主語↓「王」が）「死馬で【かつしすら】【之の馬】を買う」という自力通釈と、次の「まして生きているものはなおさらだ」（懇切丁寧すぎる脚注）をどう結合させ正解を導くのが問われる。

生徒の「カード」で最も興味深かったのが、次の解答だ。

「王に選ばれた馬のハードルが、あえて低かったから、『俺の馬だったら、絶対選ばれるだろう』と金に釣られて行動する輩が多くいて、その中により優秀な馬を持っている者が三人いて持って行ったからだ（T・T）」（低ハードル論）提唱。

なぜ、この低ハードル論Ⅱ「呼び水」理論は私たちを魅了するか。人間の深層心理を巧みにについて誰でも持ち得る強欲心や競争心を刺激し、思わず行動せざるを得ない心理作用からだ。これが「千里馬を（一萬金）で買い求める」と懸賞金を出しても千里馬は集まらない。どんな名馬でも（逆に懸賞金の高さに反比例し）「どうせ、俺の馬はだめだ」と諦めるネガティブな思考回路が働き、それが足を遠のかせてしまう。まさしく「呼び水」とは生徒の言葉で言い換えたように、「低ハードル」（象徴性）の意味を放つ。「初発カード」でここまで読みを深められたので、後の口語訳等の授業は、スムーズに展開した。

三 真の賢者は誰か

生徒は、昭王がなぜこれほどまで賢者の招聘を熱望したのか、疑問を持った。そこで改めて詳しい時代背景を紹介した。この時代背景から興味を喚起させ「千里馬」「死馬」の象徴性という「意味」を考察させ、鑑賞を深めたが、それ以上に、生徒の知的好奇心は、「涓人」「隗」の圧倒的な存在感に向かった。その行動様式と深層心理について疑問が多くあ

がったので、主な四点を紹介しよう。

①「涓人」は死馬の骨に対して五百金を本当に支払ったのか。(千金すべて旅費にあて放蕩を尽くしての帰国では?)

②「古の君」は、「涓人」を何故すぐに斬首せずに、愚かな話に耳を傾けたのか。(斬首の場合、君主は千金と千里馬の両方を失う。その損得勘定から、自分の憤怒の感情処理の仕方を見極めた君の英知は?)

③この「死馬」のたといは、史実か、隗の創作か。

④結局、登場人物で真の賢者(勝利者)とは誰なのか。

四点の疑問の(一)内は、私が補足説明しながら挑発的に発問した内容である。この内、②③④については、各設問に自由に論述(八百字以内)させ、まとめの作品鑑賞文とした。

①の疑問では、五百金を出し千里馬を買い求め、死んだので、その骨を持ち帰った話を信じる者は、皆無。初めから、どこかで拾った死馬の骨を持ち帰り、千金全て豪遊で使い切る「涓人」の智慧に脱帽する生徒たち。しかも②では、策略家「涓人」に対して、「斬首せよ」と君が命じれば、どんな反論をしたのかと私が挑発すると、生徒は熟考した後、叫ぶ。「涓人は自分を殺しても金貨と千里馬を失うだけだと懇願したはず」と。さらに「死馬さえ大金で買う君の噂は、瞬く間に各地へ伝播し、必ず千里の馬が到来するはず。それが達成できない時、彼を斬首しても遅くはない」という理論武装を説明する生徒たち。目標達成した場合、さらなる恩賞を得る計略は他を庄倒していると私が補足した後、記述させたのが、次の②の生徒作品(論述文)である。

「古の君が涓人を殺さなかった理由は、もし君が涓人を殺してしまつた場合、自分の怒りは転嫁できるが、千金と千里馬は失つたままでも得るものがなく、マイナス面がさらに拡散してしまうからだ。逆に君が涓人を殺すことを猶予した場合、涓人の主張が正しければ、千金さえ無駄金とならずに、千里馬も手中に収められる。もしかりに、千里馬が来なければ、そこで涓人に対して憎しみを込め、八つ裂きにして殺せば良いと判断したはずだ。古の君は苦々しく思いながらも熟慮した上で行動した人だと私は思う。」(N・M)

この「死馬」のたといは、「史実」「創作」の問題③が、④と深く絡み合う。「史実」と答えた生徒の場合は、「涓人」の巧みな策略は完璧だと讃えて、彼を真の賢者(勝利者)としている。また一方、感情に流されず、その策略をしつかりと受け止め、千里馬三頭を確実に手に入れた「古の君」と同様に、個性的賢者を操縦できる「昭王」こそが、名君だと称賛した生徒もいた。もし「創作」の場合、完全無欠な「呼び水」理論を「無」から「有」へと練り上げて自分を売り込むことを忘れず、その上歴史上有名な賢者三名もの招聘に成功した「隗」こそ、最高の賢者(勝利者)だと論述する生徒も多かった。同様に前述したと同じ論理で、歴史上の名君として復讐をなし得たのは「昭王」であり、隗を登用し使いこなした彼こそ賢者であるとも言えると答えた数名の生徒がいた。こんな実践でどれだけ「論理力」を養ったのか、今日も疑問を抱きながら毎時間教壇に立っている。

●特集Ⅱ漢文教師を「育てる」

『論語』の素読の実践

塩田佳子^{しおだ よしこ}

(栃木県立宇都宮女子高等学校)

本校では平成十七年度入学生より、国語科の指導において『論語』の素読を取り入れ、一年生は「国語総合」、二、三年生は「古典」の授業の冒頭で毎時間二章ずつ行っている。そのきっかけは、一年次の漢文導入の時期を古典文法を一通り学習した後の夏休み前期課外からにしたことにあった。漢文は古典文法を基本としているので、古典文法（特に助動詞）学習後に漢文指導を始めた方が効果的であると考えたためである。生徒たちは高校生になって初めて本格的に漢文を学習するが、漢字ばかりの文章に苦手意識を抱き、敬遠してしまう傾向がある。そこで導入までの四ヶ月の間、『論語』の素読を通して、毎日漢文に触れることで漢文特有の言い回しに慣れ親しませ、さらに『論語』の章句を味わうことで人間の生き方について考えさせることを目的とした。

一年次前期の『論語』の素読のやり方は、担当生徒（出席番号順に担当）に付き従って書き下し文を参考に繰り返し読むという方法である。毎時間行うことで、生徒たちは戸惑い

ながらも漢文特有の言い回しに慣れていくことができる。そして漢文学習後の一年次後期においては以下のような方法で素読を行っている。

～一年次後期の『論語』素読の方法～

- ①担当生徒が書き下し文を読み、他の生徒は白文を見ながら担当生徒の後について音読する。
- ②白文中の句形や語句の読みなど、大切だと気づいた点を隣の生徒と指摘しあう。
- ③チェックした内容に注意しながら、全員で二回ずつ、なるべく白文を見て音読する。
- ④教師が口語訳を読み、内容について解説する。
- ⑤次の章を同様に読む。
- ⑥隣の席の生徒と二人でその日に読んだ章を二回ずつ音読する。

漢文学習後の一年次後期におけるこの活動は、漢文の基本的な構造への意識付け、授業で学習した再読文字や置き字、句形の確認をするという意味で効果的である。また、まだ学習していない重要句形を先取りして学習し、教科書で出てきた際にさらに深めていくこともできる。

このように毎時間親しんでいる『論語』の理解を深めるために、平成二十二年度、二年生文型生徒、理型生徒の希望者

対象に、湯島聖堂主催の漢文検定（寺子屋論語の部）を受検した。『論語』の章句を深く理解し、自分のものとしていくためには単に表面的に文字を目で追い、教員側の解説を聞いているだけでなく、内容を把握するように意識的なことが重要であると考えた。

検定受検後にアンケートを実施したところ、『論語』の章句を今までよりも深く理解することができた」「孔子の思想のポイントがわかった」「人生観や学ぶ姿勢など人生の教訓になる章を覚えられて良かった」等、『論語』の章句の内容の深まりや自己の内面的変化を述べた生徒が多かった。また、『論語』を覚えることで句形や語句の意味も覚えられたので役に立った」等、句形への理解や漢文学習への意欲の高まりを述べた者もかなり見られた。

さらに『論語』の素読の成果を確認するために、平成二十四年一月に三年生を対象に『論語』に関するアンケートを行った。その結果、多くの生徒が『論語』の素読を経験できて良かったと回答した。自由記述においては『論語』には人生の中で何か大きな壁にぶち当たった時に解決の助けになるような言葉がたくさんあった」「漢文の文章の構成が理解できて、白文が読みやすくなった」「ほぼ毎日読んだので句形に自然と意識が向くようになった」「現代でも通用する考えを学ぶことができた」等の感想が得られた。このことか

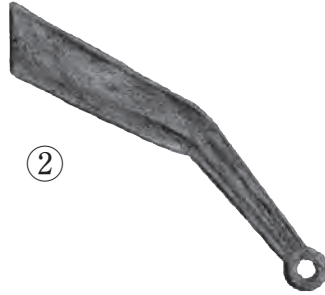
ら、生徒は『論語』を通して漢文の基礎力が身につく、儒家の思想について学ぶことができたと考えていることがわかり、本校の『論語』の素読の目標はほぼ達成できたと言える。その反面、「難しすぎて、結局何が言いたいのかわからない章もあった」と答えた生徒もあり、古来より様々な注釈が存在し、解釈が難しい章句に関しては、教員側が複数の解説を提示しながら説明するなど生徒が理解できるよう努めていく必要があるという課題も明らかになった。このように『論語』には解釈が困難な章句もあるが、短い章句で重要句形を学ぶことができ、さらに儒家の思想を理解し、そしてその章句を味わうことで生徒の肉体的な成長も期待できるという意味で、漢文初期指導において『論語』の素読は非常に有効である。

ところで、三年間に学習した古典作品の中で印象に残ったものを生徒に聞くと「論語」「伯夷叔齊」「荆軻」「赤壁賦」等の漢文教材を挙げる生徒が多い。それは、人生や人間のあり方について深く考えさせられたからだという。確かに大学受験だけを考えると漢文にかけられる授業時間は少なくなる傾向にあることは、ある意味仕方がないかもしれない。しかし、価値観が画一化し、自分の生き方が見えにくくなっている現在、教材を通じて人としてのあり方生き方を生徒に伝え、考えさせることができる漢文教材を、もっと効果的に授業に取り上げていくべきではないだろうか。

①



②



大修館の
新教科書『新編 古典』扉のコレは何？

『新編 古典』漢文編の扉には、中国古代の器物が描かれています。これらがなんだか、わかりますか？ それぞれの名称と解説を、左ページの『中国文化史大事典』の項目から選んでみてください。（答えは p.28）

③



④



ついに
刊行！

中国 文化史 大事典

中国文化を知るための決定版！

※くわしくは次ページ



●B5判・上製・函入 1,506頁
定価33,600円
(本体32,000円+税)
978-4-469-01284-2

A

とうせん【刀銭】 小刀を模倣した青銅貨幣。^{*}その初現を春秋後期に比定する説もあるが明確な根拠はない。少なくとも戦国初頭に定型化し、戦国後半期になってからようやく普及したと考えられる。刀銭は中国各地で鑄造されているが、国によって形態が異なる。主なものとして斉の斉刀、燕の尖首刀・明刀、趙の直刀などを挙げることができるが、そのなかで斉刀と明刀が数量的に他を圧倒している。……

B

しやく【爵】 口縁に注口を付け、その反対側に長くのびる尾を作る三足器。側面に把手を設ける。青銅の爵は注口の付け根に一对の柱(口縁部から立ちあがる柱状の装飾)が付く例が多い。自銘の例は無く、宋代の『考古図』以来、伝統的に爵と呼ばれる。酒を温めて注ぐための器とされ、土製の爵は二里頭文化2期に、青銅の爵は同3期にそれぞれ出現する。……

C

がとう【瓦当】 ^{のきまるがわら}軒丸瓦の先端を塞ぐ陶板。雨水が建物内に回りこむことを防ぎ、かつ軒先を飾る機能をもつ。円形のもの普通であるが、半円形のものもあり、やや複雑な形状のものもある。中国の学界では瓦当といえば軒丸瓦の先端部分を指すのが普通で、軒平瓦の先端部分は滴水と呼ぶ。……

D

ちんぼじゅう【鎮墓獸】 鎮墓獸とは墓内に置く明器^{*}で、侵入者や悪霊を防ぐための神獣をいう。その代表的なものの一つとして、戦国楚墓の木彫漆絵の鎮墓獸がある。頭上に鹿角をつけ、長い舌を垂らした怪獣型のものが木槨内に置かれた。また、前漢の淮陽墓では、鹿角をつけ両手を広げた人型座像が墓道の左右に置かれた。……

『中国文化史大事典』は、こんな事典です

○本邦最大の中国文化総合事典！

各分野の第一線の研究者約 500 人が集結。収録項目数は 7,000 余。

見出しで立っている項目以外でも、中国文化の理解に重要な約 1,400 語を関連する項目内で解説。

○中国の歴史・伝統文化をまるごと凝縮！

歴史・文学・思想はもちろん、考古学・科学技術・美術・芸能・服飾など、中国伝統文化を形づくるさまざまな分野の項目をこの一冊に。

時代は有史以前から 20 世紀初頭までを網羅。

○引きやすく、調べやすい！

全項目を五十音順に配列、簡潔・平易に解説。解説内に出てくる、見出しで立っている人名・書名などにはアスタリスク（*）を付し、相互参照を容易に。

総索引・総画索引・ピンイン索引を付し、引きやすさを追求。

[組見本（75%縮小）]

えんじゅーえんてつ

64

である。他に『潜丘劄記』などの著書がある。清史稿 481 (吉田 純)

えんじゅ【延寿】 904(天祐元)～975(開宝8)。五代・宋初の禅僧。永明寺に住したので永明延寿と称される。呉越の役人であったが妻子を捨てて出家し、天台徳韶の法を嗣ぎ、法眼宗の3世となる。960(建隆元)年呉越の忠懿王は延寿を靈隱寺新寺の第1世とし、翌年、杭州永明寺の第1世とする。禅教一致・禅淨双修の総合仏教を目指し、念仏禪の論理的根拠を導き、蓮社七世の一人に教えられている。『宗鏡録』『万善同帰集』『心賦注』『唯心訣』等の著作は高麗・日本にも大きな影響を及ぼした。(西口 芳男)

えんしゅく【燕肅】 961(建隆2)～1040(康定元)。北宋中期の文人画家。青州(山東省)の人。字は穆之。判刑部・權知審判院などを歴任、礼部侍郎に致仕し、燕侍郎とも尊称される。『海潮図論』などを著す科学者でもある。翰林学院玉堂中堂の皇帝の御座屏風『山水図照壁屏風』制作を担当し、北宋初の董羽による中堂東西北壁『龍水図壁画』に象

の語句や文様をもったものなど、用途によって様々である。(廣川 守)

えんずいえん【袁隨園】 →袁枚

えんせいこう【衍聖公】 孔子嫡系の子孫の家の爵位。孔子の子孫への賜爵は漢代からはじまり、北宋の1055(至和2)年に仁宗によって衍聖公の称号が与えられた。北宋の滅亡に際して、南北に分かれたが(南は浙江省衢州)、元以後、曲阜の孔家が衍聖公の地位を保持し、清朝に至るまで継承した。辛亥革命の後、1935年に大成至聖先師奉祀官と改められた。現在まで後継者は続く。また、曲阜県令は孔氏が任ぜられることを例とした。(森田 憲司)

えんたんし【燕丹子】 小説。3巻。作者不詳。戦国燕の太子丹が秦に辱めを受けた報復に、刺客荊軻を放って秦王政(後の始皇帝)を暗殺しようとした事跡を記す。成立時期は一説に先秦(魯迅)、また一説に後漢末以後唐まで(胡広麟)といい、『四庫全書総目提要』は「諸書の太子丹と荊軻の記事をつ

答え：①－C、②－A、③－B、④－D

《鴻門の会》にみる『史記』の文体的特徴（中）

——『漢書』との比較から

坂^{さか} 口^{ぐち} 三^み 樹^き

（文教大学）

三

《鴻門の会》における沛公の危機を救ったのは、危険を冒して酒宴の場に闖入した樊噲^{はんかい}の行動であつた。次に、『史記』と『漢書』のその場面の記述を比較してみよう。ただし、『漢書』高帝紀の記述は「樊噲聞^{きこ}事急^{じき}、直入、怒甚^{いかでか}。羽壯^{えいさう}之、賜以^{もて}酒。噲因^よ譙^{せう}讓^{りやう}羽^{えい}」。（樊噲 事の急なるを聞き、直ちに入り、怒ること甚だし。羽之を壮とし、賜ふに酒を以てす。噲因りて羽を譙讓す。）とあまりに簡略に過ぎるので、ここではより詳細な『漢書』樊鄴^{はんねき}滕灌^{とうかん}傅斬^{ふせん}周伝^{しゅうでん}（以下、煩を避けて「樊噲伝」と記す。）の記述と比較することとする（本文対照表「三樊噲闖入の場面」参照）。

両書の記述にはいくつかの相違が認められるが、ここではひとまず、①樊噲が酒宴の場に闖入するまでの経緯、②項羽が樊噲に酒肉を与える場面、③項羽の非を咎める樊噲の発話描写、の三点に絞って検討を加える。

まず①の点について見れば、『史記』の会話の多用が注意をひく。『漢書』の「乃持^も盾入^{いれ}。（乃ち盾を持して入る。）」までの部分が、会話を交えずわずか二十二字でことの経緯を平板に説明するのに対し、『史記』では「噲即^{すなはち}帶^お劔^{けん}擁^{よう}盾入^{いれ}軍門^{ぐんもん}」。（噲即ち劔を帶び盾を擁して軍門に入る。）「までの五十八字のうち、張良・樊噲の発話描写が三十二字を占めており、二人の会話によって場面が立体的に進行してゆく。とりわけ「今日之事何如^{けふのじごと}。（今日の事何如。）」「甚急^{いかでか}。（甚だ急なり。）」「此迫^{このせま}矣^{なり}。（此れ迫れり。）」といった発話からは、主人の危難に直面して緊迫する二人の様子が生き生きと伝わってくる。さらに、『漢書』では単に「持^も盾^{けん}（盾を持し）」とのみある記述も、『史記』では「帶^お劔^{けん}擁^{よう}盾^{けん}（劔を帶び盾を擁し）」のごとく細かく描写されており、そこから樊噲の決死の覚悟が浮かび上がる。また、衛兵の制止を強行突破するくだりでも、『漢書』が「噲直^{ただ}撞入^{つづ}、立^{たち}帳下^{ちやうか}」。（噲直ちに撞き入り、帳下に立つ。）と、事態の帰結を簡潔に記すだけな

のに対し、『史記』は「樊噲側^二其盾^一以撞。衛士仆^レ地。（樊噲其の盾を側^{そばた}てて以て撞く。衛士地に仆^ふる。）」と突破の際の様子を具体的に描写し、「披^レ帷西嚮立、瞋^レ目視^二項王^一。頭髮上指、目眦盡裂。（帷を披きて西嚮して立ち、目を瞋^{いか}らして項王を視る。頭髮上指し、目眦^{もくし}尽く裂く。）」のごとく、真向かいに立つてまっすぐに項羽を睨みつける樊噲の行為を、その怒りの形相のすさまじさまで含めてこと細かに描き出す。さらにそうした樊噲の行動を受けての項羽の反応についても、『漢書』が「項羽目^レ之、問^レ爲^レ誰。（項羽之を目し、誰とかがすと問ふ。）」のように、必要最小限の説明ですませているのに対し、『史記』では「項王按^レ劍而跽^レ曰、『客何爲者。』（項王劍を按じて跽^{ひざまづ}きて曰はく、『客何爲る者ぞ。』と。）」と、項羽の動きを具体的に描く。こうしたディテールの具体的な描写が、一触即発の緊迫した場面を生き生きと描き出すのに効果をあげていることは容易にみて取れよう。

次に、②の場面の記述について見よう。ここでも、『史記』が「賜^二之卮酒^一。（之に卮酒を賜へ。）」、「賜^二之彘肩^一。（之に彘肩を賜へ。）」という項羽の命じた短い言葉を畳みかけるように重ね、それに樊噲の行動を対応させながら事態の展開をスリリングに描いていくのに対し、『漢書』では項羽の発話描写は省略されて「賜^二之卮酒彘肩^一。（之に卮酒彘肩を賜ふ。）」との説明的な記述となっており、『史記』のような緊迫感は失われている。また、樊噲の行動についても、『漢書』はた

だ「噲既飲^レ酒、拔^レ劍切^レ肉食^レ之。（噲既に酒を飲み、劍を抜き肉を切りて之を食らふ。）」と簡潔に記すだけであるが、『史記』には「噲拜謝起、立而飲^レ之。（噲拜謝して起ち、立ちながらにして之を飲む。）」「樊噲覆^二其盾於地^一、加^二彘肩^一上、拔^レ劍、切而啗^レ之。（樊噲其の盾を地に覆せ、彘肩を上に加へ、劍を抜き、切りて之を啗^{くら}らふ。）」とあつて、樊噲の行動がその細部に至るまで具体的に描写される。これらの具体的な描写によつて、敵愾心もあらわに項羽に真つ向から立ち向かう樊噲の豪胆さが印象づけられ、二人の対峙の場面が鮮明に浮かび上がる。

さらにこの部分で注目すべきは、項羽が樊噲を評した「壯士。（壯士なり。）」の語であろう。『史記』では二度発せられているこの語が、『漢書』では一度しか記されていないことは大きな相違といわねばならない。なぜなら、『史記』における最初の「壯士。」と二度目のそれとでは、少しくそのニュアンスを異にすると考えられるからである。一度目の「壯士」には、酒宴の場に乱入してきた樊噲の無礼な行動に対する皮肉が込められていよう。というのも、その後に樊噲に与えられたのが「斗卮酒」であり「生彘肩」であつてみれば、そこに樊噲に対する好意的な評価が示されているとは到底考えにくいからである。むしろそれは、樊噲を試し辱めんとする意図に出るものであつたろう。しかし、樊噲はそのような項羽の威圧的・挑発的な行為に怯むことなく、毅然とし

て受けて立った。そこで発せられた二度目の「壯士」には、先のそれとは違って、樊噲の豪胆さに対する項羽の素直な賛嘆の気持ちが入められているのではないか。このように考えれば、『史記』における二度の「壯士」の語は、この場面における項羽の心の動きを伝えて余すところがない。『漢書』のように「壯士」が一度だけでは、残念ながら項羽の心の動きまでは伝わってこないのである。

最後に、③の項羽の非を咎める樊噲の発話描写について考察しよう。ここで注目すべきは、なによりも『史記』における樊噲の発話描写の長大さであろう。『漢書』の当該部分も、五十一字と比較的多くの字数を発話描写に費やしているが、百三十一字という『史記』の圧倒的な言語量には遠く及ばない。しかも『史記』では、それに対する項羽の応答として、ただ「坐。(坐せよ。)」の一語をもつてする。無骨な武人である樊噲の思いがけない長広舌にすっかり圧倒された項羽は、ただ一言「座れ。」というのが精一杯であったというのである。この百三十一字と一字の対置は、その場の雰囲気までも髣髴させる見事な筆法といえよう。『漢書』では、項羽の押し黙った姿を「默然」と形容して描きはするが、『史記』のごとき対置の妙は見られず、樊噲の論難にたじろぐ項羽像もやや希薄になった感は否めない。

なお、この樊噲の発話中に見える「夫」の一字についても付言しておきたい。このような「夫」は、「発語の辞」とい

い、新たに話題を始める際に用いられる語であると説明される。⁽⁸⁾ここでは、項羽が「壯士。能復飲乎。(壯士なり。能く復た飲むか。)」と好意を示しかけたのに対し、樊噲は「臣死且不_レ避。卮酒安足_レ辭。(臣死すら且つ避けず。卮酒安くんぞ辞するに足らん。)」と受けた後で、話題を項羽に対する非難に転換する。それまでの酒の話題はここでおしまい、とピシヤリと話題を打ち切って、舌鋒鋭く項羽非難の言辞が展開されるのである。この「夫」の一字は、そうした樊噲の項羽に対するにべもない態度を鮮やかに伝えているといえよう。⁽⁹⁾

(以下、次号)

注(7)ただし、この「斗」生をめぐっては議論がある。「斗」について、滝川亀太郎『史記会注考証』所引李笠注では、『漢書』には「斗」の字がないこと、「卮」は四升を入れるものであること、前後の項羽・樊噲の言葉には「斗」の字がないことを理由に、この字を衍字とする。また生注流についても、⁽⁸⁾晁補之は生で食べるものではないので衍字であるとする。梁玉繩の説と、孫侍郎の、わざと生の肉を出して試したのだとする説を引く。

(8) 積大典『文語解』巻之四には「語端ノ辭ト注ス。篇首ノ發語ニ用ユ。……篇中ニ一段端ヲアラタムル時コノ字ヲ用ユ。」とあり、また、牛島徳次『漢語文法論(古代篇)』(大修館書店、一九六七)では、「且」は「さて」「それに」、「夫」は「いったい」、……というような「はなし」を始める際の語調を整える役目を果たしていると考えられる。(二〇〇頁)と説明する。

(9) 『漢書』樊噲伝では「且」の字が用いられているが、「且夫」のように併用される例もあることから、『史記』の「夫」とはほぼ同じ働きをしていると考えられる。

『史記』項羽本紀

於是張良至軍門見樊噲。樊噲曰、「今日之事何如？」良曰、「甚急。今者項莊拔劍舞，其意常在沛公也。」噲曰、「此迫矣。臣請入，與之同命。」噲即帶劍擁盾入軍門，交戟之衛士欲止不內。樊噲側其盾以撞，衛士仆地。噲遂入，披帷西嚮立，瞋目視項王。頭髮上指，目眦盡張。項王按劍而跽曰、「客何為者？」張良曰、「沛公之參乘樊噲者也。」項王曰、「壯士，能復飲乎？」樊噲覆其盾於地，加彘肩上，拔劍切而啗之。項王曰、「壯士，能復飲乎？」樊噲曰、「臣死且不避，彘肩之上，拔劍切而啗之。今沛公先破秦入咸陽，還軍霸上，以待將軍。勞苦功高，未有封爵之賞，而聽細人之說，誅有功之人。此亡秦之續耳。竊為大王不取也。」項王未有以應，曰、「坐。」樊噲從良坐。坐須臾，沛公起如廁，因招樊噲出。

是に於いて張良軍門に至り、樊噲を見る。樊噲曰はく、「今日の事何如」と。良曰はく、「甚だ急なり。今者項莊劍を抜きて舞ふ。其の意常に沛公に在るなり」と。噲曰はく、「此れ迫り。臣請ふ入りて之れと命を同じくせん」と。噲即ち劍を帶び盾を擁して軍門に入る。交戟の衛士、止めて内れざらん欲す。樊噲其の盾を側て以て撞く。衛士地に仆る。噲遂に入り、帷を抜きて西嚮して立ち、目を瞋らして項王を視る。頭髮上指し、目眦尽く裂く。項王劍を按じて跽きて曰はく、「客何為る者ぞ」と。張良曰はく、「沛公の參乘樊噲といふ者なり」と。項王曰はく、「壯士なり。之に卮酒を賜へ」と。則ち斗卮酒を与ふ。噲拝謝して起ち、立ちながらにして之を飲む。項王曰はく、「之に彘肩を賜へ」と。則ち一の生彘肩を与ふ。樊噲其の盾を地に覆せ、彘肩を上に加へ、劍を抜き、切りて之を啗らふ。項王曰はく、「壯士なり。能く復た飲むか」と。樊噲曰はく、「臣死すら且つ避けず。卮酒安くんぞ辞するに足らん。夫れ秦王虎狼の心有り。人を殺すこと挙ぐる能はざるがごとく、人を刑すること勝へざるを恐るるがごとし。天下皆之に叛く。懷王諸將と約して曰はく、『先づ秦を破りて咸陽に入る者は、之に王とせん』と。今沛公先づ秦を破りて咸陽に入る。毫毛も敢て近づくる所有らず、宮室を封閉し、還りて霸上に軍し、以待大王の來たるを待てる。故らに將を遣はし関を守らしめし者は、他盜の出入と非常にに備へしなり。勞苦だしくして功高きこと此のごとし。未だ封侯の賞有らず。而るに細説を聴きて、有功の人を誅せんと欲す。此れ亡秦の続のみ。窃かに大王の為に取らざるなり」と。項王未だ以て応ふること有らず。曰はく、「坐せよ」と。樊噲良に従ひて坐す。坐すること須臾にして、沛公起ちて廁に如き、因りて樊噲を招きて出づ。

『漢書』樊噲伝

時獨沛公與張良得入坐。樊噲居外。聞事急，乃持盾入。初，入營，營衛止噲。噲直撞入，立帳下。項羽目之，問誰。張良曰、「沛公參乘樊噲也。」項羽曰、「壯士，能復飲乎？」噲曰、「臣死且不避，彘肩之上，拔劍切而啗之。今沛公先破秦入咸陽，還軍霸上，以待將軍。勞苦功高，未有封爵之賞，而聽細人之說，誅有功之人。此亡秦之續耳。竊為大王不取也。」項王未有以應，曰、「坐。」樊噲從良坐。坐須臾，沛公起如廁，因招樊噲出。

時に独り沛公と張良とのみ入りて坐するを得。樊噲營外に居り。事の急なるを聞き、乃ち盾を持して入る。初め營に入るに、營衛噲を止むる。噲直ちに撞きて入り、帳下に立つ。項羽之を目し、問ふ誰とか為すと。張良曰はく、「沛公の參乘樊噲なり」と。項羽曰はく、「壯士なり。之に卮酒を賜へ」と。則ち一の生彘肩を賜ふ。樊噲其の盾を地に覆せ、彘肩を上に加へ、劍を抜き、切りて之を啗らふ。項羽曰はく、「能く復た飲むか」と。噲曰はく、「臣死すら且つ辞せず。豈に特だに卮酒のみならんや。且つ沛公先づ入りて咸陽を定め、師を霸上に暴し、以待大王を待てる。大王今日至るや、小人の言を聴き、沛公と陳有り、臣天下解心して大王を疑はんことを恐るるなり」と。項羽默然たり。沛公廁に如き、噲を磨きて去る。

三、樊噲闖入の場面

二〇一三年度センター試験の漢文について

諏訪原研
(河合塾)

概要

今年の漢文の問題文は、宋代の文人張耒ちようらいの『張耒集』問双堂賦自序からの出題で、昨年と同じ宋代の随筆でした。

全文一段落構成の文章ですが、前半に筆者の体験、後半に筆者の感慨が述べられ、さらに前半の体験が二年間の出来事に分けられているという、かなり複雑な文章構成になっています。また、後半の感慨には、未来への不安と希望という複雑な気持ちが述べられていて、その対比的な心境をしつかり読み取れたかどうかが内容把握のカギになります。

本文の総字数は一九八字で、昨年より一七字減少し、二〇〇字を超えていなかった三年前までの状態に戻りました。ただ、今後とも二〇〇字前後の長さは維持されるものと思われます。設問数は昨年より一問増えて、センター試験が始まって以来初めて八問になりました。ここ二年続けて一問ずつ増えているわけですが、マーク数は三年前の九個から変わっていません。設問数の変動と関係なく、マーク数は今後

も九個前後で推移するものと思われます。

設問では、昨年まで四年間続いていた問1の語意問題が、今年は熟語を構成する語意の判別問題に変わりました。この出題形式は二〇〇五年度までの旧課程の入試では時々見られましたが、新課程になってからは初めてです。一方、昨年まで二年連続して出題された文中の空欄補充問題が今年はありませんでした。問題文が随筆という性格から、筆者の心情や状況、心境を問う設問が例年になく多かったのが特徴的でした。全体として昨年に比べてやや難といったところでしょう。

設問の解説

【問1】傍線部(1)(2)と同じ意味の語を含む熟語を選ぶ問題。

(1)「手」は「手づから」(自分の手で)と読む副詞で、下の動詞「植う」を修飾していますから、同じ「副詞+動詞」という構造を持つ「手記」(自分の手で記す)が正解です。この問題は全問中最悪の出来で、河合塾の受験生追跡調査のデータでは正答率がわずかに20・4%でした。(2)「致」は「致ス

【問題文】

始、余以丙子秋、寓居宛丘南門、靈
 通禪刹之西堂。是歲、季冬、手植、兩海棠
 于堂下。至丁丑之春、時、沢屢至、棠茂悦
 也。仲春、且華矣。余約常所、与飲者、且致
 美酒、将三、一醉于樹間。是月、六日、予被、
 書、治行之、黃州。俗事粉然、余亦遷居、因
 不復省花。到黃、且周歲矣。寺僧、書來言、
 花、自如也。余因思、茲棠之所、植、去余、
 無二十步、欲与隣里親戚、一飲而樂之、宜
 可、必得、無難也。然、垂至而失之、事之不
 可知、如此。今去棠、且千里、又身在、罪籍、
 其、行止、未能、自期、其于棠、未遽、得見也。
 然、均于、不可、知、則亦安、知此花、不忽然
 在、吾目前乎。

(張耒『張耒集』による)

美酒」という文脈から「持ち寄る」という意味であることがわかれれば、正解の「招致」を選ぶのは容易でしょう。正答率は74%で、全問中最高の出来でした。

【問2】傍線部Aにおける筆者の心情把握問題。

筆者の心情が直接吐露されている文はありませんが、傍線部の「棠茂悦也」や直後の「且華」といった象徴的表現や、「致美酒、将三、一醉于樹間」（うまい酒を飲んで海棠の下で酔っ払おう）といった筆者の行動に関する叙述から、筆者の心情が満ち足りた喜ばしい状態にあることがわかります。ただ、正答率は56・4%とかなり低い出来でした。

【問3】傍線部Bにおける筆者の状況説明問題。

状況説明の問題ですが、実質的には傍線部の解釈が問われています。「不復」は「二度としない」と訳す部分否定の句法ですが、「それきりしない」も許容範囲の訳ですから、「省花」（花を見る）の訳がカギになります。正答率は65・8%でした。

【問4】傍線部Cの時期に関する問題。

本文の内容の時間的展開を追っていくと、丙子（一〇九六年）の冬に海棠を植え、翌年の丁丑（一〇九七年）の春、海棠の開花を待たずに黄州に左遷され、その転居から「周歲」（まる一年）経った頃に手紙が来ますから、「左遷された翌春」が正解です。正答率は70・2%という高率でした。

【問5】傍線部Dの返り点と書き下し文の問題。

「与」(〜と)の用法と、「欲」(〜と欲す)がどこまで掛かるかを見きわめる問題です。傍線部が「宜」以下の部分に対して条件節を構成していますから、「欲」は「楽之」まで掛かることになります。正答率は64・4%でした。

【問6】傍線部Eの解釈問題。

「事」の内容がポイントで、「余因思」^{リテフニ}以下の筆者の感慨の要因になった出来事をまとめることになります。海棠の花を楽しみにしていたのに、急な左遷でその機会を失ったこと、つまり「我が身に襲ってくる将来の運命」というほどの内容にまとめられるでしょう。正答率は67・6%でした。

【問7】傍線部Fの書き下し文と解釈の問題。

構文「安く乎」が疑問・反語のどちらの句法であるかを文脈で判断し、「此花」が海棠の花を指すことを押さえれば正解が得られます。正答率は60・7%でした。

【問8】本文全体における筆者の心境説明問題。

問6、問7と関連した問題で、「余因思」^{リテフニ}以下の筆者の心境の変化を正確に読み取ることが重要です。つまり将来の予測が不可能という不安定な状況は、現在の不遇な状況が変わり得ることもあるという、楽観的・大局的見地に立って自分の運命を捉え直しているのです。傍線部Fの意味が難解だったせいか、正答率は二番目に悪い53・1%でした。

明暗を分けた問題

今回の試験では、正答率が極端に低かった問1の「手」(てづから)の意味用法と、問8の筆者の心境説明問題の出来が明暗を分けました。特に問8は問7とも関連しており、昨年と同様に反語文の解釈力が問われています。このように、重要語と反語をはじめとする句形の理解が、得点力アップには欠かせないことがわかります。

来年度以降の出題予想と対策

ここ二年続けて随筆文が出題され、いずれも途中までは読み取れるものの、最後に近づくにつれて難解になるといった文章でした。今後もこうした随筆文や、一昨年まで続いた論説文の出題が十分予想されますから、正確な読解力を養う必要があります。例年必出の漢字対策としては、今年の「手」(てづから)や二〇一〇年度出題の「動」(やもすれば)が古文の重要語でもあることに鑑み、今後は漢文、古文に共通した重要語という観点も視野に入れた対策を講じていく必要があるでしょう。具体的には、古文単語の意味を説明する際に、漢語を起源とする語や漢字の当て字がある語は、その漢字を含めた説明を加味するといった、「古典」としての総合的な学習を考慮していく姿勢が大切でしょう。

戸張 東夫 著

『中国のお笑い——伝統話芸“相声”の魅力』

(四六判・並製・三頁・本体、八〇円 大修館書店・あじあブックス)



中国のお笑い“相声”とは、日本の落語、漫才、コントに例えることができる伝統話芸能だが、それらと異なるのは、ストーリーに合わせた歌や踊り、京劇や雑技などの物まねがあり、単なる話芸ではなく、一種の総合芸術であることだ。また、数百年の歴史があり、古い言葉や、伝統劇の曲などもしばしば登場するので、外国人がその魅力に気づくためには相当な中国語力が必要になる。このため、日本で“相声”についての紹介本はほとんどなかった。本書の刊行を知ったとき、驚きと同時に嬉しかった。

数年前、著者から中国“相声”が趣味だと聞いた。筆者は出身地が、“相声”の本拠地でもある天津の隣町で、幼少時から“相声”に親しんできただけではなく、小学校の学園祭のとき、“対口相声”(二人で演じる相声)を演じた経験もあるので、地

元の伝統話芸を趣味とする著者には大変親近感を持った。帰国したついでに“相声”のCDをお土産として著者に差し上げたが、本書を読んで著者が趣味を研究対象に変え、また私の“お土産”も資料に使用していることを初めて知った。

本書において著者は、“相声”を楽しむための基礎知識や楽しみ方について紹介している。その際、日本の芸人や漫才、映画と比較しながら解説することで、“相声”の芸人や作品の特徴を初心者でも理解できるように工夫している。そういう意味で、本書は“相声”の魅力を味わうための、初心者向けのガイドブックだと言っても過言ではなからう。

まず、中国の政治変動にその人生と創作を大きく左右された二人の“相声”作家——何渥と老舎を紹介した上で、主に中華人

民共和国建国後の各時期に最も注目されてきた五人の芸人——侯宝林、馬季、姜昆、師勝傑、郭德綱の芸風と特徴について紹介している。作品の一部分を和訳し、解説を試みているため、読みながら生の“相声”を楽しむこともできる。

著者は元新聞記者でもあり、相声と中国の政治との関係を常に注目しながら、分析している点も本書の特徴の一つである。異なる時期の作家や芸人の紹介を通じて、中華民国から共産党政権へ移行した間に、中共の政治宣伝・イデオロギー教育に利用されるようになった“相声”および政治に翻弄された芸人の変容過程、さらに、文化大革命を経て、改革・開放政策を実施していく過程で、政府による関与が緩和され、芸人の個性が発揮できるようになった中国芸能界の現状を論じている。特に反主流派の人気芸人——郭德綱の主張とその“相声”の紹介を通じて、“相声”の現状に警鐘を鳴らしているが、本書は中国“相声”業界全体に希望を込めて、そのさらなる発展を促し、日本に中国文化として紹介した一冊であるといえる。

(王雪萍・東京大学)

定価〃本体十税5%(2013年5月現在)

渡邊 義浩 著

『王莽——改革者の孤独』

(四六判・並製三〇頁・本体一、六〇〇円 大修館書店・あじあブックス)



一九一一年の清朝滅亡まで続く王朝国家中国の、統治制度・社会形態そして思想傾向などの基本は、前二〇二年から二二〇年までの前後漢約四百年間にほぼ定まる。だが中間の八年に王莽が帝位を篡奪し、以後十五年間は新の時代となる。伝統的に中国では劉氏の漢は好評なので、漢を中断させた王莽・新は不評を買っている。この王莽の事績を詳論し、その歴史的意義を評価したのが本書である。

もともと儒家は秦の焚書坑儒に耐えて漢初に復興し、経伝を漢代の隸書の書体に書き改め、口伝も書籍とし、これらをテキストとして教義を整えていく。隸書を今文と呼び、テキストを今文経伝、その学を今文学という。儒学を習得した官僚(儒家官僚)も次第に増加し、中期の武帝期に至ると、儒教經典の易経・書経などの五経の博

士官が太学(帝国大学)に設置される。いずれも今文学派である。儒学の教説が政治の場で用いられ、そこで従来、儒教は武帝期に国の教えとなる、つまり儒教の国教化が実現する、と考えられていた。だが近年、具体的な政策と儒学教説との結びつきの検討などが進められ、儒教の国教化を武帝期以後とする複数の説が出される。それらを本書は検証した上で、王朝国家中国に共通する理念、「古典中国」を指定する。それは儒学教義に基づく中国の古典的な国制の完備を内容とし、その具体像は「儒教国家」である。王莽は「古典中国」を想定して「儒教国家」の設立を試み、失敗に終わる。だが彼の試行は継承され、およそ五十年後の後漢第三代章帝期の白虎観会議で古典的国制は儒学教義で確立されて「古典中国」が成立し、そして儒教の国教化は完成

する。これが本書の主張である。

今文学が世に浸透した前漢後期に、漢以前の古文で記されたテキストが現れる。これを古文経伝といい、その学を古文学と称する。『周礼』『春秋左氏伝』が代表的なテキストで、古文学派はこれらの博士官設置を求める。王莽は今文学を習得した後、古文学に接近し、摂政(安漢公)になると古文学の博士を立てる。即位後も今文学説とともにより多くの古文学説を用いて政治の改革を進める。その一例に南北郊祀がある。天の祭りは天の子である皇帝の専権事項で、併せて地も祭るこの祭祀は重要な国家儀礼であった。前漢末期の成帝に後嗣のない原因が、この祭祀の場所の不適切さにあるとされるなど、祭場が幾度か変更された。だが王莽は今文経伝と古文のそれとで儒学的な理論づけを整え、天の祭場を都長安の南郊、地を北郊と定め、祭儀の内容も具体的に規定し、南北郊祀を確定する。

本書は儒学教義に根拠づけられた古典的国制は、大部分が王莽により定められ、実施も試みられたことを詳説し、王莽・新の歴史的意義の重要性を明らかにする。王朝国家中国の政治と儒教との結びつきを再認識させてくれる好著である。(田中麻紗巳)

定価 本体+税5%(2013年5月現在)

分冊

豊富な教材から選んで使える。
入試対応も万全。

精選

必要な教材を効率よく学ぶ。
基本から入試まで
幅広く対応。

新編

基礎・基本を重視。
実社会で活きる
言葉の力を育む。

国語総合



国語総合 現代文編・古典編
〔国総31・312〕

あわせて4単位



精選 国語総合 〔国総313〕

4単位



新編 国語総合 〔国総314〕

4単位

現代文B



現代文 上巻・下巻
〔現B308・309〕

あわせて4単位



精選 現代文 〔現B310〕

4単位



新編 現代文 〔現B311〕

4単位

古典B



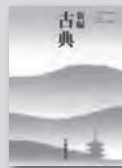
古典 古文編・漢文編
〔古B310・311〕

あわせて4単位



精選 古典 〔古B312〕

4単位



新編 古典 〔古B313〕

4単位

※平成27年度用として「現代文A」「古典A」を検定申請中です。

大修館版国語教科書のシリーズ展開

実情に合わせて選べる、
3つのシリーズ展開

大修館書店 〒113-8541 東京都文京区湯島2-1-1 電話03-3868-2291(編集部直通) <http://www.taishukan.co.jp>

豊富な教材から自由に選べる

「古典B」教科書のご案内



特色

1 時代とジャンルを網羅した、充実の教材数

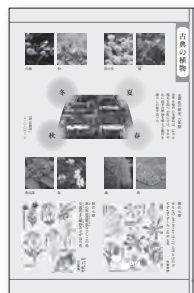
古文編 漢文編の分冊タイプとすることで、教材数を大幅に増やしました。さまざまな現場の実情にに応じて、教材を自由に選び、組み合わせることができます。

2 教材に即して要点を確認できる、文法の設問

古文編では、ほぼすべての教材に「文法」の設問を設け、総合的な文法力が身につく識別の問題を中心に、確認しておきたいポイントを網羅しました。

3 教材に即して要点を確認できる、句法のまとめ

漢文編では、各教材ごとに「訓読で注意する文字」と「句法」をまとめ、重要なポイントを整理できるようにしました。さらに頻出の八つの句形について用例付きで丁寧に解説したコラム「基本句形のまとめ」を掲載し、要点を随時参照できるようにしました。



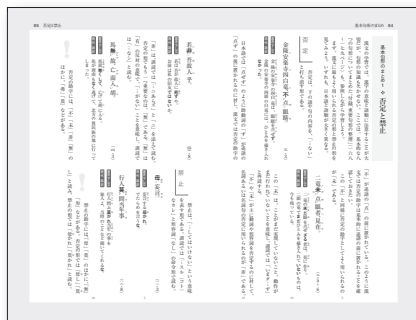
古文編・漢文編とも、本文理解に必要な地図・系図などの資料のほか、絵巻・さし絵などもカラーで効果的に収録しています。

4 新しい発想でまとめた、役立つ巻頭図録

巻頭には古典の学習に有益な図録を11ページにわたり掲載。模型や写真を効果的に使い、ビジュアル世代の高校生が古典の世界を豊かにイメージできるよう工夫しました。

5 古典の理解がより深まる「古典の窓」

単元末に適宜書き下ろしコラム「古典の窓」を設け、作品・作者の魅力や文学史についての理解がより深められるようにしました。



入試を見据えた2年間履修に



精選 古典 「古B312」

特色

1 重要な作品を精選、 効率的に古典を学べる

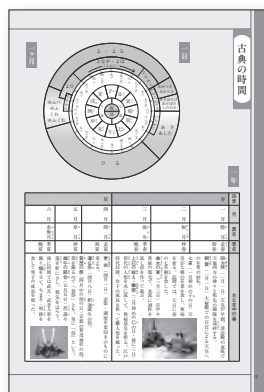
二・三年次の古典学習に必要な教材を精選して一冊にまとめた、二部構成の教科書。古文編では「源氏物語」「枕草子」「大鏡」を中心に、漢文編では「小説」単元をはじめとした読み応えのあるまとまった文章教材を充実させ、大学入試にも配慮しました。

2 教材に即して文法・句法の要点を 確認できる

ほぼすべての教材に、古文編では文法の設問、漢文編では「訓読で注意する文字」と「句法」をまとめ、教材に即して重要なポイントを整理できるようにしました。さらに漢文編には頻出の八つの句形を解説したコラム「基本句形のまとめ」を掲載し、要点を随時参照できるようにしました。

3 新しい発想でまとめた、 役立つ巻頭図録

巻頭には古典の学習に有益な図録を11ページにわたり掲載。模型や写真を効果的に使い、ビジュアル世代の高校生が古典の世界を豊かにイメージできるよう工夫しました。



古文編巻頭図録や漢文編
「基本句形のまとめ」など、
役立つ資料も充実。

古典の楽しさを伝える、新時代の教科書



特色

1 「古典への招待」

各単元の最初に、その単元で扱う作品の概略や魅力を、年表や図解をまじえてビジュアルに描き出した特集ページ「古典への招待」を設けました。

2 生徒を引き込む教材、斬新な教材化

教材は基本的かつ生徒の感性に訴えるものを厳選。大岡信「百人一首の恋の歌」の後に折込で全首掲載した「百人一首」、蕪村の絵と読む「奥の細道」、安野光雅の挿画が印象的な「三国志」など、教材化や見せ方にもさまざまな工夫を盛り込みました。

3 新しい発想でまとめた、役立つ巻頭図録

巻頭には古典の学習に有益な図録を11ページにわたり掲載。模型や写真を効果的に使い、ビジュアル世代の高校生が古典の世界を豊かにイメージできるよう工夫しました。

その単元で扱う作品の概略や魅力を、年表や図解をまじえて描き出した「古典への招待」を設けました。

「百人一首」を美しいカラー折込で全首掲載。学習意欲を高めるためのさまざまな工夫を盛り込みました。

